

介護実習におけるルーブリック評価の提案

福田 洋子 青木 信子 野呂 健一 寶來 敬章 鷲尾 敦
高田短期大学 高等教育研究会

1. はじめに

2012年8月に「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」が中央教育審議会によってまとめられたことにより、各大学の改革にむけた方向性や方策が具体的に示された。プログラム中心の授業の実施や具体的な学修（学習）成果の可視化など、学士課程だけでなく教育制度や各教育段階においても大きな転換期となっている。そして、学士課程の質的転換で求められる「生涯にわたって学び続ける力」「主体的に考える力」を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見出していく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である」と主張されている（中央教育審議会、2012、p.9）。

能動的学修への教育方法の転換は、評価とも大きく関連づけられて議論される。従来のような、授業担当者による一方向的な授業や、根拠が示されないままの評価では、能動的学修の成果や評価をすることは困難であることは想像に難くない。「教員と学生が意思疎通を図り」、「相互に刺激を与えながら成長する」のが求められているのであれば、評価についても学生自身が、「何が求められ」、「どこまでできているのか」、そして「これから何が必要なのか」という指標が必要になる。つまり、大学をめぐる評価方法・内容の転換も同時に求められているのである。

そして現代の大学教育をめぐる一つの潮流に「ルーブリック (Rubrics)」がある。これは、「ある課題をいくつかの構成要素に分け、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて詳細に説明したもの」（Stevens, Dannelle D., and Levi, Antonia J 訳書 2016、p.2）とされている。つまり、学生が何を学習するのかを示す評価基準と、学生がどのレベルで学習到達しているのかを示す評価基準を明示し、マトリックス形式で示す定性的な評価指標である。これは、アメリカの高等教育機関では広く活用されており、総括的評価としての評価の公平性、客観性、厳格性を高めるだけでなく、形成的評価としてフィードバック、診断的評価としての事前指導や事前学習等において有効だとされている（沖、2014）。日本の高等教育機関においても、ルーブリックの作成、活用が多く見られるようになっている。初年次教育のルーブリック（山田他、2016 や京、2016 など）やコモンルーブリック（今崎・溝渕、2016）、外国語（英語）のルーブリック（松崎、2016）、アカデミックスキルについてのルーブリック（石出、2016）など、である。本学においても、一部の教科や授業についてはルーブリックの作成や活用が見られるものの、決して多くない状況である。また、実習関連のルーブリックに関しては、主に看護の分野で広く活用・研究

はされているが、保育実習や介護実習などについてのルーブリックの研究蓄積は未だ少ない状況である。

本学は保育者や介護福祉士、オフィスワーカーを養成する高等教育機関であり、学科・コースを問わずほとんどの学生が希望する職業につくための実習科目を履修する。本学高等教育研究会は、研究活動の一つとして「実習関連のルーブリック作成」について研究を進めており、本稿は介護実習のルーブリック評価の検討・作成を大きな目的としている。実習評価のルーブリックはその特質上、実習担当者のみで作成できるものではなく、実習園や施設、機関等の意向なども勘案しながら作成する必要がある。また、本稿で作成するルーブリックは介護実習において学生が習得する技術的な側面を評価するためのものではなく、実習に対する姿勢やマナーなど、いわゆる、どの実習においても共通に必要なものとして考えられる項目のルーブリックを作成することに主眼を置いている。本稿では介護実習でのルーブリック評価を検討しているが、今後これらの項目について、他の実習においても活用できる汎用性の高いルーブリックを作成することを本研究の継続的な課題として考えている。

2. 介護実習の評価における課題

2. 1 介護福祉士養成教育

2009年から実施されている新カリキュラムでは、介護福祉士養成教育における科目が、「介護」「人間と社会」「こころとからだのしくみ」の3領域に分類されている。介護教育は、①介護の根拠となる知識や技術の基本を理論的に学ぶ、②知識や技術の基本を踏まえて学内で実際に課題に取り組む、③最先端の介護現場に出かけて、学校で学んだことや身に付けた技術を実践し、自分自身の力量を試し、ふり返り、また新たな学習課題をつかむという3つの学習が交互に繰り返されて教育効果を高めている。

介護実習は、「介護総合演習」(120時間)と「介護実習」(450時間)が「介護」の領域のなかに位置づけられている。介護実習の総時間数450時間は、実習Ⅰと実習Ⅱの施設・事業所が区別され、2種類の介護実習が行われる。

実習Ⅰは、利用者の生活の場である多様な介護現場において、利用者理解を中心とし、これに併せて利用者・家族との関わりを通じたコミュニケーションの実践、多職種協働の実践、介護技術の確認等を行うことに重点を置いた実習であると位置づけられている。実習Ⅱでは、一定期間以上継続して実習を行う中で、利用者ごとの介護計画の作成、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった一連の介護過程のすべてを継続的に実践することに重点を置いた実習である。それぞれの目的や内容に違いがあり、実習先に関する規程も違うことから、学生の実習目標や学ぶ視点にも差異がある。ゆえに実習評価においても実習Ⅰと実習Ⅱの評価内容には差異がある。

介護実習での学びは、介護福祉士養成教育にとって最も重要な位置づけであり、充実した学習成果を上げることが期待される。つまり介護福祉士を目指す学生にとり学習成果を目の当たりにする実習評価の位置づけは、次のステップへの足がかりとなるもので、実習評価からの自身の課題の明確化は必然となる。^{1,2}

2. 2 介護実習評価の課題

現在、三重県介護福祉士養成施設協議会では、「介護実習の手引き 介護実習ノート」を編集し、学生

の介護実習における実習評価について、実習指導者が、実習後の評価で戸惑いがないように、各学校の評価票を統一した形で作成している。この評価票は、介護実習での学生の学びを高めるための項目が設定されており、2010年から現在に至り改良されながら利用されてきている(図1)。

介護実習の手引きには、実習評価の項目別評価着眼点、評価基準が示され、評価票は、1から5段階評価で、評価項目は一文であらわされている。実習終了後の評価において、学生は、この評価基準のどこがどのように良かったのか、悪かったのか、わからない状況にある。さらに実習評価を受け取った学生が、1から5段階での評価で、「意欲的に頑張ったのに、遅刻や欠席もなく、早めに準備して実習に臨んでいたのに、なぜ5ではないのか」と自己評価と実習評価のギャップに戸惑い、聞きにくくすることもある。その不明な点を補うために、各項目に実習指導者(評価者)のコメント欄が設けてあり、教員は実習巡回指導での情報と実習評価票の評価点

様式K-②

介護実習Ⅱ 評価票

※評価票は、各校の実習状況に応じ、適宜抜粋して使用する。
※各項目の評価点は実習手引きの評価基準を参照。

学 校 名	高田短期大学		学籍番号		氏 名	
実 習 期 間	年 月 日(曜日)～		年 月 日(曜日)		(日間)	
評価点	5:大変よい 4:よい 3:普通 2:努力を要する 1:かなり努力を要する					
評価項目	評価着眼点	評価点	評価できること	根拠・改善点		
実 習 意 図	備 性	意欲的に取り組む姿勢が見られる				
	協 性	教員・利用者・実習生との協調性がある				
自 己 目 標	守 則 性	利用者のプライバシーに配慮できる				
	礼 儀	規則を守り礼儀正しく挨拶できる				
コ ン ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン	健康管理	自分の健康に留意できる				
	実習内容	自分の立身した目標が効果的に実施できる				
介 護 活 動	自己評価	自分の実施した実習内容を客観的に評価できる				
	意思疎通の理解	利用者との意思疎通を求め、利用者から感情や思いを表現できるように心がけられる				
	利用者理解	利用者や家族を思いやる態度が理解できる 生活者として、身体的・精神的・社会的な側面から個別性が理解できる				
	生活支援技術	利用者に応じた介護の必要性が理解できる 個別性に応じた介護が実習指導者とともに実施できる ケアプランのニーズに応じたリハビリテーションを企画し実施できる				
	福祉用具の理解	福祉用具を使用する目的が理解できる 利用者に応じた正しい使用ができる 介護に必要な福祉用具の効果が理解できる				
	介護過程の展開	情報を分析し、介護ニーズが把握できる 実施可能な具体的な介護計画が立案できる 自ら立案した介護計画を実施できる 自らの介護実践を振り返り、評価する				
	観 察	介護場面における利用者の反応や行動が観察できる				
施 設 理 解	記 録	介護場面を的確に表現し、自己評価につなげることができる				
	報 告	利用者の変化や反応など報告を要する事項を判断し、報告できる				
施 設 理 解	施設理解	施設の運営が理解できる				
	職種理解	様々な生活の場での役割や果たす役割がわかる 職種間の専門性を理解し、介護福祉士の役割と専門性としての意識と連携の意義がわかる				
総括評価点 (1～5にて評価)		総括コメント				
上記の通り評価します		施設名		印		
平成 年 月 日		施設長名		印		
		登録指導者名		印		

図1 現在利用している介護実習Ⅱ 評価票

やコメントから評価点の意図を推し量り、学生に説明している現状である。学生は、記載されている評価者のコメントと教員の説明とにより、評価点の評価の経緯を推測し了解しているのが実態でもある。

実習評価は、実習指導者と学生の関わりの中で、見えない心の動きも加味されているようにも思える。それは、日本人の「察しの文化」による阿吽の呼吸や以心伝心にも似た見えない何かも作用しているように感じる。

高田短期大学は、留学生も多く、日本人の物の見方や考え方に慣れていない学生もいることから、評価に関しては、具体的にどこが悪く、どこが良かったのかを教えてほしいと言ってくる学生も多い。さらに、自分の課題が何かを具体的に理解し、それに向かってさらに学習を進めたいと意欲のある学生もいる。

現在、各大学においてルーブリック評価による、学生評価のみ見える化が進められていることから、介護実習においても、より学生に納得の行く実習評価方法についての考察を進めていくことができないか

と考えた。

今回、介護実習Ⅱにおけるこれまでの実習評価票を、3段階評価のルーブリック評価票に改訂し、これまでの評価票と新（ルーブリック）評価票を検討した。

3. 高等教育研究会での検討

3. 1 課題の発見

高田短期大学高等教育研究会は、平成28年度設立され、8月8日にキックオフミーティングを開いた。研究会での研究テーマを検討する中で、評価の見える化、評価の平等化など、数値化できない評価をする上でルーブリック評価を高等教育研究会でのテーマの一つとすることを議論した。その過程で、研究員より介護実習における各実習先での評価のばらつきの課題について2章で記述したような話題提供があった。それを解決する上でルーブリックを評価方法として取り入れるとこれらの課題が解決するのではないかという仮説が出された。議論を深める中で、実際にこの研究会で開発してはどうかと提案された。そして、この実習評価のルーブリックは、介護実習に限ったことではなく、保育実習、教育実習、社会体験実習といった本学で実施されている様々な実習に広げることができるのではないかと、介護実習のルーブリック化は、それに先駆けて開発する意義があるのではないかという意見となり、高等教育研究会のテーマとして進めていくことにした。

3. 2 現状の把握

9月12日に第2回目の研究会を開き、施設の実習担当者の学生評価への意見や評価を受ける学生の反応など介護実習評価の現状について情報交換を行った。

介護実習評価は、三重県介護福祉士養成施設協議会発行の「三重県版 介護実習の手引き 介護実習ノート」（以下、介護実習ノートと呼ぶ）に基づいて、学生の自己評価、実習先担当者による実習評価が行われている。介護実習ノートには、実習評価票Ⅰ・Ⅱがあり、評価項目とその評価基準が示されている。評価規準は、5段階の評価点で表記されているが、施設の状況や評価者によって評価軸がずれたりすることがある。また、評価の根拠となる評価基準内容は、資料において記載されているが、項目においては利用しにくいところもある。

保育者養成でも同様の評価票があり、実態とあわない部分もあるが、必ず同じものを使わなければならない、簡単には修正はできない。オフィスワークコースの社会体験実習の評価にも、いくつかの評価項目があり、平成28年度の社会体験実習ノートに記載されている評価基準は段階評価であったため、記述語をつけたルーブリックの必要性が考えられた（後日、28年度にルーブリック評価を実施したと授業担当者から報告があった）。

介護実習の評価は、評価項目が大変多いことから、ジェネリックスキルに近いものに絞って検討することとし、介護実習ノート記載の図1の評価票の中から、「実習態度」について検討することとした。

3. 3 評価基準の検討

まず、提案があったのが、図2の評価表である。ここでは、ジェネリックスキルといっても、現場の介護スタッフが、評価項目に示された内容が実習学生のどの行動に結びつくのかが理解しやすいように、

評価項目を実習に即したものにしている。例えば、「積極性」を「指導を受ける態度（素直さ、積極性）」とし、「協調性」を「職員との協調性（仕事内容の理解、強調）」とした。

作成にあたって、積極性などの項目は、介護実習ノートの評価基準に記載されているものが多岐にわたるため、ルーブリックの記述語には苦勞した。作成にあたっては、『大学教員のためのルーブリック評価入門（玉川出版）』を参考にした。研究会では、次のような検討をした。

- 一つの評価項目の中に二つの視点が混在し、どちらかができるできないで、評価の段階がどちらが上かわからないところがある。評価項目を分けてはどうか。（例えば、指導を受ける、素直さ、と積極性が相反している。）
- ルーブリックはパフォーマンス評価であるから、どういうことができるかという目標を最初に示す必要がある。また、ルーブリックは、学生に事前に見せることが前提である。
- 手引きにある評価基準を評価指標として細分化（小項目）し、それぞれに基準をつけてはどうか。それらのチェックの多いところを評価規準（例えば積極性）の評価としてはどうか。
- 実習Ⅰ、実習Ⅱとあるので、評価を学生の成長レベルにあわせていくものにしてはどうか。マイナスの記述語を記載せず、これができたというプラスの記述語にし、例えば、実習Ⅰでは、0、1、2の2が到達目標レベルであり、実習Ⅱでは同じ項目があれば、3、4の4が到達レベルとなる、というような、2年間の成長を見越したルーブリックにしてはどうか。
- 介護実習では、最高の5は、介護職の現職の最高得点と同じと考え、学生には5を出さない担当者もいる。学生の段階での目標レベル5と介護職としてのレベル5との違いを説明する上でもルーブリックで目標（5レベル）をしっかりと記述することは意義がある。

評価項目	評価基準		
実習態度	指導を受ける態度	5	指導や助言を素直に受け止め、自分で仕事を探するなど、積極的に仕事をした
		4	指導や助言を素直に受け止め、同じ指導を受けないよう、前向きに仕事をした
		3	素直さはある、決められた仕事はしたが、質問や積極性が少し足りなかった
		2	指導者の指導や助言を素直に受け止めることができなかった
		1	指導者の指導や助言を素直に受け止めることができないし、決められた仕事もできなかった
	職員との協調性	5	施設のやり方を見えられるし、すべての職員と協調して行える
		4	施設のやり方を見えられるが、特定の職員とのみ協調できる
		3	施設のやり方をなかなか見えられないし、特定の職員とのみ協調できる
	仕事内容の理解 協調	2	施設のやり方を何度教えても見えられないが、教えるやろうとする。職員と協調できない
		1	施設のやり方を見えられないし、何度教えてもやろうとしない。職員と協調できない
	コミュニケーション力	5	利用者・職員とコミュニケーションを取り、楽しい雰囲気ですべてに臨んでいる
		4	利用者・職員とコミュニケーションはとるが、中には話さない職員・利用者がある
		3	利用者とは楽しい雰囲気ですべてに臨んでいるが、職員とはコミュニケーションを取ろうとしない
		2	職員とはコミュニケーションは取るが、利用者とはコミュニケーションを取ろうとしない。表情も硬い
1		利用者・職員とコミュニケーションを取らないし、表情も硬い	
守秘義務	5	介助時の差恥心などプライバシーへの配慮がなされている。利用者が特定されないように、会話や記録の書き方に配慮できている。	
	4	介助時の差恥心などプライバシーへの配慮がなされている。しかし利用者が特定されないように、会話や記録の書き方の配慮に欠ける	
	3	介助時の差恥心などプライバシーへの配慮に欠けているが、利用者が特定されないような、会話や記録の書き方の配慮はできている	
	2	介助時の差恥心などプライバシーへの配慮に欠けているし、利用者が特定されないような、会話や記録の書き方の配慮はほとんどできない	
	1	介助時の差恥心などプライバシーへの配慮に常に欠けている。利用者が特定されないような、会話や記録の書き方の配慮もまったくできない	

図2 1回目の提案があった評価票(一部)

実習Ⅱ		評価 1	評価 2	評価 3	評価 4	評価 5	
積極性	意欲的に取り組む姿がみられる	興味や関心を広げる	実習や介護福祉に関わる内容について質問したり、自ら調べたりしている様子が普段の活動の中や実習ノートに全く見られない	実習や介護福祉に関わる内容について質問したり、自ら調べたりしている様子が普段の活動の中や実習ノートに若干ある。	実習や介護福祉に関わる内容について質問したり、自ら調べたりしている様子が普段の活動の中や実習ノートに見られる	実習や介護福祉に関わる内容について質問したり、自ら調べたりしている様子が普段の活動の中や実習ノートに良く現れている。	実習や介護福祉に関わる内容について質問したり、自ら調べたりしている様子が普段の活動の中や実習ノートに良く現れ、実際に職員の人とこのことについて議論している。
		わからなかったことを継続して考える	実習でわからなかったことをそのままにしている。	実習でわからなかったことを質問して解決しようとしている	実習でわからなかったことを質問し、さらに自分なりに考えて解決しようとしている	実習でわからなかったことを質問し、そのことについて考えを職員に伝えている	実習でわからなかったことを質問し、そのことについて職員と議論して問題解決に動いている。
		職員と今後の学習課題について話す	実習における自分の課題について職員から指摘されても自分のこととして受けとめず、今後の自分が学ぶべきことについて職員に話していない	実習における自分の課題について職員から指摘され、そのことについて自分のこととして受け止め、考えているが、自分が何を学ぶべきかについて職員には話ができていない	実習における自分の課題について職員から指摘され、そのことについて自分のこととして受け止め、考え、自分が何を学ぶべきかについて職員に話している	実習における自分の課題について職員から指摘され、そのことについて自分のこととして受け止め、考え、自分が何を学ぶべきかについて職員に話している	実習における自分の課題について職員から指摘され、そのことについて自分のこととして受け止め、職員に相談しながら、自分が何を学ぶべきかについて職員に話している
		質問や意見を伝える機会を積極的に活用する	職員と活動しているときや反省会などの機会があるにも関わらず質問も意見を伝えることもしていない	職員と活動しているときや反省会などの機会に、質問や意見を伝えることがあった。	職員と活動しているときや反省会などの機会に、積極的に質問や意見を伝えることができた。	職員と活動しているときや反省会などの機会に、積極的に質問や意見を伝え、さらに議論を深めようとしていた。	職員と活動しているときや反省会などの機会に、積極的に質問や意見を伝え、さらに議論を深めて成長する様子が感じられた
		利用者の話を聞き、必要な情報を得る	利用者と話をしていない	利用者とは基本的な会話をすることができている	利用者の話を聞き、介護に必要な情報をえようとしている	介護をするにあたって必要な情報を利用者から聞き取ることができている。	介護をするにあたって必要な情報を、利用者から聞きとり、その情報をよりよい介護に活かしている
		スーパービジョンなどで得た情報を活用できる	スーパービジョンなどで得た情報を活用していない	スーパービジョンなどで得た情報を介護に活用する機会があった	スーパービジョンなどで得た情報を介護に活用しようとしている。	スーパービジョンなどで得た情報を積極的に介護に活用しようとしている。	スーパービジョンなどで得た情報を積極的に介護に活用しようとして、効果的な介護ができていた。
		職員と利用者、あるいは他の職員とのやりとりに関心を持つ	職員、利用者、あるいは他の職員同士のやりとりに関心を持っていない	職員、利用者、あるいは他の職員同士のやりとりに関心を持つ時がある。	職員、利用者、あるいは他の職員同士のやりとりに関心を持っている	職員、利用者、あるいは他の職員同士のやりとりに関心を持って、積極的に話かそうとしている。	職員、利用者、あるいは他の職員同士のやりとりに関心をもって注意を向け、積極的に話かそうとしている。

図5 ルーブリックの提案（実習Ⅱの一部） H28/12末

平成29年1月17日の第6回研究会において原案を検討した。多くの評価指標をそれぞれ5段階で評価することがとても大変であり、各基準の違いを明確に区別するための記述語の作成過程で行き詰まりもあった。結局、5段階の基準は細かすぎるという結論に至り、3段階とすることとした。そして、評価指標の追加・削除を含めて議論を進めた。評価規準の評価指標の数が異なるため（2～5,7指標）、規準ごとに5段階評価にするには、計算が面倒になる課題が指摘された。以上を踏まえ、3つの基準の記述語を整理し、計算方法についても検討し、図6～8の試作ルーブリックが完成した。

養成校の先生方や実習の担当者の方々に、意見を伺うアンケート調査を実施することとした。完成した試作品は、介護実習ノートの評価規準が5点満点なので、同様に表せるよう点数化の方法を工夫した。各評価規準の評価指標の数が異なるため、それぞれの規準の評価指標の得点の合計を評価指標数で割ることとした。例えば、積極性の評価規準には7つの評価指標が存在する。そこで、各評価指標の評価基準を3段階とし、1段階が1点、2段階（中間）が3点、3段階（最高点）が5点とし、それらの合計を評価指標数の7で割り算することにより、評価領域の点数が決まるようにした。全ての指標が5であれば、5点になり、全ての評価指標が1であれば1となる。

実習Ⅱ 評価規準		評価指標(目標)	1点	3点	5点	評価点	合計点	評価規準評価点
積極性	意欲的に取り組む姿がみられる	興味や関心をもって行動する	実習や介護福祉に関わる内容について質問したり、自ら調べたりしている様子が普段の活動や実習ノートに全く見られない	実習や介護福祉に関わる内容について質問したり、自ら調べたりしている様子が普段の活動や実習ノートに見られる	実習や介護福祉に関わる内容について質問したり、自ら調べたりしている様子が普段の活動や実習ノートによく現れ、実際に職員の人とこのことについて議論している			点 (合計点/7)
		わからないことを聞き、聞いた上で問題解決し、行動に移す	実習でわからなかったことをそのままにしている	実習でわからなかったことを職員に質問をして、問題解決するが行動に移せない	実習でわからないことをよく職員に質問して、問題解決し、行動に移せる			
		実習中の学習課題に気づき、改善に努める	実習における自分の課題について職員から指摘されても自分のこととして受け止めておらず、自分が学ぶべきことを理解もしていない	実習における自分の課題について職員から指摘され、そのことについて自分のこととして受け止め、考え理解している	実習における自分の課題について職員から指摘され、そのことについて自分のこととして受け止め、考え理解し、改善に努めている			
		カンファレンスの際に積極的に発言する	カンファレンスの際に質問も意見も言わない	カンファレンスの際に質問や意見を伝えることができる	カンファレンスの際に積極的に質問や意見を伝え、さらに議論を深めて成長する様子が感じられる			
		利用者の話を聞き、必要な情報を得る	利用者と話をしていない	ある程度利用者と話し、介護に必要な情報を得ようとしている	介護をするにあたって、常に必要な情報を利用者から聞きとり、適切な情報を得ている			
		多職種から得た情報を活用できる	多職種から得た情報を活用できない	多職種から得た情報を一部活用している	多職種から得た情報を十分に介護に活用できる			
		職員と利用者、あるいは職員同士のやりとりに関心を持つ	職員、利用者、あるいは職員同士のやりとりに全く関心を示さない	職員、利用者、あるいは職員同士のやりとりにある程度関心を示している	職員、利用者、あるいは職員同士のやりとりに常に関心を示している			

図6 試作したルーブリック (その1)

実習Ⅱ 評価規準		評価指標(目標)	1点	3点	5点	評価点	合計点	評価規準評価点
協調性	職員・利用者・実習生との協調性がある	職員の助言・指導を受け入れる	職員の助言・指導を聴かない	一部の職員の助言・指導を聴くが受け入れることができない	すべての職員の助言・指導を聴き、受け入れることができる			点 (合計点/5)
		丁寧な言葉づかいをする	職員・利用者に対して丁寧な言葉づかいができない	職員・利用に対してたまに不適切な言葉づかいをする	職員・利用に対していつも丁寧な言葉づかいができる			
		周りの状況を考えて行動できる	当たり前のように常に自分の都合を優先して行動する	自分の都合だけで行動はしているが、時々自分の都合を優先することがある	自分の都合だけで行動せず、常に周りや協調して行動することがある			
		相手のプライドを傷つけないかわりをする	相手のプライドが傷つくような言動をしている	相手のプライドが傷つくような言動が時々見られる	いつも相手のプライドを傷つけないかわりができる			
		表情豊かに利用者や職員とかわることができる	表情がまったくない	たまに豊かな表情で利用者や職員とかわることがある	常に豊かな表情で利用者や職員とかわることができる			
守秘義務	利用者のプライバシー保護に配慮できる	居室に入る時はノックをし、声をかける	居室に入る時に、ノックも声かけもしない	居室に入る時に、時々声かけやノックを忘れる	居室に入る時は常にノックをし、声をかける			点 (合計点/4)
		排泄介助をする時は、利用者及び職員に了解を得る	利用者及び職員に了解を得ることなく、排泄介助をしている	利用者に頼まれると職員に了解を得ることなく、排泄介助をしてしまう	排泄介助をする時は必ず、利用者及び職員に了解を得ている			
		私物に触れるときは、利用者及び職員に了解を得る	利用者及び職員に了解を得ず、私物の入っているロッカーなどを開ける	時々、利用者及び職員に了解を得ず、私物の入っているロッカーなどを開けることがある	必ず利用者及び職員に了解を得てから、私物の入っているロッカーなどを開ける			
		利用者のプライバシー保護のため、実習記録やレポートの作成・管理を慎重に行う	利用者のプライバシー保護ということを意識せずに、実習記録やレポートの作成・管理の仕方がずさんである	実習記録やレポートの管理を慎重にしようとしているが、記録の中にプライバシーを侵害する内容が時々書かれている	利用者のプライバシー保護を常識と捉え、実習記録やレポートの作成・管理を慎重に行える			

図7 試作したルーブリック (その2)

実習Ⅱ 評価規準		評価指標(目標)	1点	3点	5点	評価点	合計点	評価規準評価点
礼儀	規則を守り礼儀正しく接遇できる	朝の挨拶、帰りの挨拶を行い、礼儀正しく行動する	朝の挨拶、帰りの挨拶がまったくせず、礼儀正しくない	朝の挨拶、帰りの挨拶をしなかったり、礼儀正しくないことがある	朝の挨拶、帰りの挨拶は毎日必ず行い、礼儀正しく行動できる			点 (合計点/4)
		決められた時間に遅刻しないように余裕をもって行動する	約束した日時を忘れ、来なかったり遅刻したりする。	約束した日時に時々遅刻し、遅刻しない時も時間に余裕がない	約束した日時に遅刻しないように時間に余裕をもって行動できる			
		遅刻や欠席をする場合は、実習先と学校に連絡する	遅刻や欠席の際に学校や実習先のどちらにも連絡しなかった	遅刻や欠席の際に学校や実習先のどちらか一方にしか連絡しなかった	遅刻や欠席は全くないか、遅刻や欠席の際に、学校と実習先の両方に連絡した。			
		提出物の提出日時や提出場所を守る	提出物の提出日時や提出場所がわからず、提出しない	提出物の提出日時に間に合わず、まとめて提出する	提出物を決められた提出日時や場所に毎回必ず提出する			
健康管理	自分の健康に留意できる	体調管理ができ、欠席や早退がない	体調管理ができず、欠席・早退がたいへん多い	体調管理ができず、欠席・早退が数回あった	体調管理をしっかりとし、まったく欠席をすることがなかった			点 (合計点/2)
		自己管理ができ、元気で実習に取り組める	体調や精神面で元気がない日が多く、常に実習に悪い影響がある	体調や精神面で元気がない日があり、時々実習に悪い影響がある	体調や精神面での自己管理ができており、毎日元気に実習に取り組める			

図 8 試作したルーブリック (その3)

4. 第1回目プレアンケート

(1) 調査概要

本調査は、介護福祉士養成施設の教員と介護実習施設の実習指導者に対し、介護実習Ⅱの「実習態度」の評価において、ルーブリック評価を取り入れた場合の評価項目や評価基準の妥当性、評価のしやすさ、しにくさなど、今までの評価票と比較しての意見を独自に作成した質問紙で調査した。

(2) 調査目的

介護実習Ⅱでの、これまでの実習評価方法およびルーブリック評価票の評価方法に対する意見を頂き、よりよい実習評価方法の方向性を考える資料とする。

(3) 調査対象

介護福祉士養成施設 4 校の教員と 14 か所の介護実習施設の実習指導者

(4) 調査時期

平成 29 年 2 月 3 日から 2 月 24 日

(5) 倫理的配慮

研究概要、回答は無記名で任意であり、調査結果は施設名や個人が特定されない、データは本研究以外に使用しないことを口頭、書面にて説明し承諾を得た。

5. 試作ルーブリックと現場の声

第1回目プレアンケートを介護福祉士養成施設 4 校の教員 7 名に実施した。その結果は、次に示すような意見があった。肯定的な意見の重要ポイントには下線を引いた。また、課題と思われるところは二重下線とした。

《今までの評価票と新評価票を比較しての意見》

- ・新評価表 (ルーブリック) は、今までの評価票の内容が具体的になっていて分かりやすい。
- ・評価項目が多く、学生や先生に具体的に説明したり、指導したりするには、有効と考えます。

- ・各項目別に詳しく書かれており評価点が付けやすく、領域評価点もすぐできるので評価しやすい。
- ・これまでの実習評価は、介護技術の評価ではなく、人物評価に重きを置いていたように思います。評価基準の各項目が抽象的であり、把握しにくく、どの部分に重きを置いて評価して頂いたのかわからない部分があり、評価するのに難しかったと思います。また、できていない部分をマイナス点にとらえての評価だったと思います。新評価票は、各項目別に詳しく書かれており、評価しやすい。全体を見ての評価になるし、プラス面を見ての評価になっていると思います。
- ・各施設によっての評価の考え方のバラつきがあり、統一されていないように思える。項目を絞れば非常にわかりやすい新評価になると思います。しかし項目の内容などが多くなると施設の職員の負担となるかと思います。
- ・評価票を基に、自己覚知ができているのかどうか、実習後では分からない。実習指導者にお任せすることと、カンファレンスでの反応を伺うことに留まる。新評価票では、一つ一つ丁寧ではあるが、この量をチェックするのは少し難しい気がします。
- ・評価の基準がややあいまいな部分がある。
- ・「良く職員に質問する」とは個人の判断で良いのでしょうか。
- ・評価基準の表現に不適切な表現がある（利用者の話ばかりが情報収集でないように感じます。）
- ・評価基準の表現に学生に求めるのはハードルが高い項目がある。（例：多職種から得た情報を十分に活用する）
- ・評価点は、1点、3点、5点のみで評価するのですか。2点、4点もあるのですか。

介護実習Ⅱの9施設の指導者からの意見は次の通りであった。

《実習指導者の意見》

- ・評価しやすくなると思う。
- ・評価はしやすくなると思うが、3点と5点の判断が難しい。
- ・より具体的に記入されており、評価者自身の基準のブレも少なくなると思います。また、学生自身も自己評価がしやすくなり、自分の学ぶべき項目も目標として、明確になると思います。
- ・区分かきちんとなされており迷いが少ないように思う。
- ・総括コメントの記述欄があっても良いと思う。
- ・細かい評価の内容が具体的に記されており良いと思う。
- ・点数に分けて評価内容があり理解しやすい。
- ・今までの評価表だと評価内容が多くどこを基準に考えて良いか分かりづらかった。
- ・新評価表だと内容が見やすく分かりやすい。
- ・点数別に内容が書いてあるので評価しやすい。
- ・3段階評価はしやすい。
- ・評価表の内容に該当しない学生もいると思う。（3段階に分けられる人とそうでない人がいると思う）
- ・学生の細かい助言を書くところがない。
- ・さらに細かい評価が必要ではないかと思った。
- ・協調性の5点の内容は少し疑問が残る。
- ・3段階の評価なら、1点、3点、5点出なくても1点、2点、3点でもよいのではないか。

6. まとめと今後の課題

今回は、実習Ⅱの評価票の中から実習態度のみをループリック評価票にした。アンケートの結果、実習態度のみでは、全体を通しての意見が言えないとの記載もあったが、ループリックによる評価方法に

ついて、介護福祉士養成施設の教員、実習指導者の意見は、概ね見やすい、評価しやすいとの見解であった。これまでの評価は、評価基準と学生の性質や、動きを加味してシミュレーションしながら評価していく状況があった。また評価点の意図は、コメントとして書き記して評価の根拠となる意見として補足されていた。しかし、ルーブリック評価は、評価内容と点数が表面化され、指導者の評価した理由が一目瞭然となり、学生への説明がしやすくなることから評価基準としては理解しやすいとの意見が多かった。

今回が第1回目の調査であることから、多くの課題もあげられた。今後、この課題を修正しながら実習Ⅱの評価票の全内容をルーブリック評価にすることを目指し、実際に評価票として使えるようにしていくことを目標としたい。さらに介護実習だけでなく、他の実習科目においても、実習先での評価に応用していく方向性を検討していきたい。

(註)

1. 介護福祉士養成講座編集委員 (2015) 『介護総合演習・介護実習 第3版』新・介護福祉士養成講座10 中央法規出版
2. 三重県介護福祉士養成施設協議会 平成29年度版 『三重県版 介護実習の手引き 介護実習ノート』中央法規出版

(参考文献)

- ・今崎浩、溝淵淳 (2016) 「広島文教女子大学におけるコモンルーブリック開発と実践的展開」『広島文教女子大学高等教育研究』第2号、pp. 9-28.
- ・中祐貴 (2014) 「大学におけるルーブリック評価導入の実際—公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して—」『立命館高等教育研究』第14号、pp. 71-90.
- ・京祥太郎 (2016) 「ルーブリックを取り入れた学部留学生における初年次教育」『至誠館大学研究紀要』第3巻、pp. 55-60.
- ・中央教育審議会 (2012) 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」.
- ・松崎邦守 (2016) 「外国語 (英語) のルーブリック開発に関する実践的研究」『北海道教育大学紀要』第67巻、第1号、pp. 211-220.
- ・宮本佳子、楠永敏恵、吉賀成子、永松美輝恵、重松良成、柗崎京子 (2017) 「介護実習Ⅰの実習記録に対するルーブリック評価と指導の課題」帝京科学大学 第23回日本介護福祉教育学科会発表要旨集、p. 29.
- ・山田嘉徳、岩崎千晶、森朋子、田中俊也 (2016) 「初年次教育での学習活動における学びと評価を巡る教授・学習論的検討」『関西大学高等教育研究』第7号、pp. 79-90.
- ・Stevens, Dannelle D., and Levi, Antonia J. (2013) *Introduction to Rubrics: An Assessment Tool to Save Grading Time, Convey Effective Feedback, and Promote Student Learning*. Stylus Publishing (=佐藤浩章監訳、井上敏憲、俣野典訳 (2016) 『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部).